

# ポーターから奄美を考える

①

岩下明裕



日本や世界の境界（ポーター）地域について研究してきた身にとって、奄美は長年、気になる存在だった。鹿児島と沖縄の間に連なり、広がる島々。

私は熊本で生まれ、幼少時を都城（宮崎）で過ごした。中学・高校は鹿児島島の私立に進み、市内の寮や下宿で生活した。「田舎」育ちを自覚していたものの、だからといって国境や境界に興味があつたわけではない。

当時、両親が暮らしていた宮崎（清武）と鹿児島を休みの際に国鉄で往復するのみ。錦江湾から望む桜島と西郷さあぐらいしか記憶に残っておらず、あとは夜遊びで天文館をうろついたり思ひ出。志布志や山川は知っていたが、その向こう側に「鹿児島」があることも知らなかった。同級生たち

生のとき、ゼミ旅行で沖縄本島に行ったことがある。貧乏学生だったから、往復とも博多発着の船旅だ。途中、通り過ぎる島々に興味もなく、船旅の長さだけが骨身にしみた。これは沖縄の海の青さと戦争を学ぶ旅だったように思う。

縁があつて、北海道にある大学に勤務するようになった。それは旧ソ連や東欧といった地域を研究してきます。研究所ができたのは昭和30年代、この名前にな

## 北の端っこで多様さ、広さ知る

は東京に憧れ、ひたすら「上」を目指して勉強していた。

つた。南九州の人間が北の大地へ移る。日本の北の端っこ、そして日本の「多様さ」と「広さ」を知る契機となつた。新しい職場の名

たのは政治的な理由です。冷戦期ですけん。最初は「連続研究所」が候補だったのだけど、右の人が嫌がった。

私には東京への反発はあつても、なぜか憧懐はなかつた。一浪して九州大学に入ったが、南九州をふるさ

前はスラブ研究センター（当時）。多くの人に尋ねられた。「スラブって、コンクリートの建物を支える床

誰もが一瞬？となるスラブになったのです。東欧って言っても、ルーミアアや

ハンガリーはスラブ民族でないだろうって、突っ込まないでね」

やがて東欧諸国で革命が起こり、国のかたちが変わっていく。そして本丸ソ連



開聞岳。島から九州「本土」へ向かうランドマーク

も解体して国境が大きく変わった。困った私たちは「ユーラシア」という名前を研究所にプラスした。ポーター（境界）は動き、変わるもの、私のポータースタディーズへの旅もこうして始まった。

なぜ私がポーターに目覚めたのか、そして奄美に惹かれたのかを語りたいところだが、紙面が尽きそうなので、次回やりませう。

で、昨年度後半、奄美大島に分室をもつ鹿児島大学国際島嶼教育研究センターで研究をさせていただく機会を得た。連載もその縁

だ。今年度ならコロナで身動きがとれないから、幸運であつた。

とこころで全国で危機感が薄かったところ、北海道でコロナ感染者数が突出し、3月初頭、道知事が緊急事態

を早く宣言したのを覚えておられるだろう。島めぐりを続けていたある日、私はこう言われた。「コロナを北海道から連れてきたのか」。いえ、鹿児島大学におり、県内から。でも「私は北海道人」。アジア人が世界で「コロナマン」と呼ばれていた頃。今では「東京人」が「コロナ」の連ひり屋。国境を閉しても、日本のなかで、至るところにポーターが張り巡らされ、コロナへの差別が日々、再生産されている。

◇ (北海道大学教授) いわした あきひろ 1962年生。北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授。専門はポータースタディーズ(境界研究)。主著に「世界はポーターフル」(北海道大学出版会)